

の傑作には、四個の法輪が別にあつて、象、牛、馬、獅子の四獸を現はしてゐる。茲に明かにしておくことは、象は受胎、牛は降誕時の星宿とせられる牛宿、馬は「出城」の馬、獅子は釋迦牟尼の別名であつて、釋種の獅子 *Sākya-simha* に依る。何れにしても、之で此の四獸が始終彫刻に現はれ、常に慣例に従つて蓮座がついてゐても驚く事はあるまい。而して、時には寫生的に現はし、時には、ペルシア風に翼を添へてゐる事もあるが、之は彫刻を施す場所が多いのに、而も定つた題材であるから、同じ題材について出来るだけ變種を試みてゆく爲である。(佛陀伽耶、第三九—五〇圖)

然らばかの四大奇蹟はどうなつてゐるかといへば、古い玉垣は僅かに小部分があるに過ぎないけれども、皆之に據つてゐて、色々の型もあり、常に一層簡略に現はしてゐる。(佛陀伽耶、第二〇、三一、三二、三三圖)然し、世尊在世中の事柄としては之だけに止まらず、梵士優樓頻螺迦葉 *Kāśyapa Uruvilva* の歸佛があり、之は逸見君が巧に推定を下されたが、サーンチーの額形彫刻に同様のもの、あるに徴して確められる。(佛陀伽耶、第一四圖。B、一〇〇頁參照)更に、